http://commonf.net　E-Mail:info@commonf.net

茅風

Breeze from the field of thatch-grass

2012年12月18日
森林塾青水
事務局便り
茅風通信 38 号

藤原小中学校児童らによる「ふるさと」合唱

◆9月～11 月の活動報告（事務局）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
□東京楽習会②開催報告（稲　貴夫）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
□秋のいきもの調べ（増井太樹）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
　ー上ノ原は昆虫たちの楽園でした！
■特集：全国草原サミット・シンポジウム in みなかみ
・参加された皆さまのご感想・レポートで知る 3 日間　・・・・・・4
　小山尚子（亀成川を愛する会）　乾　和佳葉（東京在住）
　武子さん、フミ子さん、ゑみ子さん（地元の皆さま方）
　岡村奈実（東洋大学2年生）　川端英雄（森林塾青水）
　木村伸介（みなかみ町役場・環境課）
・トピックス：地元物産販売が活況！（北山郁人）・・・・・・・・・・・・9
・基調講演と実践報告（上ノ原）とサミット宣言文　・・・・・・・・・・10
□写真で見る「茅ボッチの運び出しとその行方」（事務局）・・・12
◆藤原の“ほっと”ショット・コーナー④（中村智子）・・・・・・・・・13
◇編集後記～塾長のつぶやき～　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14

■　9月～11 月の活動報告

●９月８日、２９日：増井幹事と先輩の山崎さん（世田谷すみればネット）が上ノ原の秋の昆虫調べ。結果、驚喜すべき事実が判明！（レポート→２頁ご参照）

●９月２２日～２３日：講座「コモンズ村ふじわら」⑤開催。フィールドスタデイ参加の東洋大生諸兄４４名、視察に訪れた「環境ジャーナリストの会」ご一行８名を含め、草原の生き物調べやミズナラ林の整備、野点など秋の上ノ原を満喫。野点のお手伝いをいただいたゑみ子さん、武子さん、フミ子さん、智子さん、学生のインタビューに応じていただいた親男さん、純一さん、一幸さん、北山さん、ミズナラ伐採ご指導の仁三郎さん、皆さんありがとうございました。

●９月２７日：第４回「草原サミット実行員会」に浅川、北山、清水が出席、情報提供ならびに参考意見具申。

●９月３０日：利根川をテーマにした、今年度「東京学習会」の第２回開催。参加７名で、“小堀（おおほり）の渡し”とその周辺の自然観察ならびに舟運の歴史探訪。（詳報→２頁・稲幹事レポートご参照）

●１０月１７日～１８日：森林技術総合研修所「生物多様性研修会」の受入れ。林野庁ならびに都道府県職員など全国各地から参加の研修生など２１名のフィールドスタデイ受入れ。ご協力をいただいたＮＡＣＳ－Ｊの出島さん、ロッジ「高嶺」の仁三郎さん、ありがとうございました。

●１０月２７日～２９日：第９回「全国草原サミット・シンポジウム in　みなかみ」（主催・みなかみ町）。幹事諸兄は２６日から前泊、直前準備作業のお手伝い。参加者は初日の茅刈り・現地見学会８０名、２日目シンポジウム１１８名、懇親会１１５名、最終日サミット２１７名と日増しに増加、延べ参加数は４１５人に（町役場）。３日間を通じ、多くの感動的な出会いや出来事があり、参加された多くの方々から賛辞と激励のお言葉をいただいた。先ずは、岸町長はじめ町役場の皆さま方ならびに林区長はじめ藤原区の皆さま方の労をねぎらい共に喜びを分かち合いたい。（詳報→４頁特集ご参照）

　なお、茅刈り体験で刈り取った茅２７５束は例年通り全量、地元・藤原区へご寄贈申し上げた。

●11月17日～18日：講座「コモンズ村ふじわら」⑦開催。初日、積雪の悪条件下、茅ボッチの運び出し（→12頁ご参照）と野点。2日目、茅の引き出しの続きと割薪づくり。最後に、十二神様に今年一年の安全と実りを感謝しつつ「山の口終い」。（写真下）

　林区長はじめ、雪の中お出ましいただきましたフミ子さん、智子さん、久さん、惣一郎さん、萬枝さん、渡辺さん、親男さん、純一さん、木村さん、大金専務さん、皆さまご苦労さまでした、ありがとうございました。

（以上）

■「東京学習会」②開催報告　　稲　貴夫
「利根川を渡る−小堀の渡しと流域の自然」

第２回東京楽習会を９月３０日(日)に開催しました。今回の学習会は現地学習会として、取手市の渡船で利根川を渡り、流域の自然と文化に触れることを目的に計画していました。しかし、台風十五号が近づく中、学習会当日の予報は、午前中は晴れですが、次第に天気は下り坂となり、夜半には暴風雨の恐れがありました。渡し船は荒天が予想されると安全な場所に移して係留されるため、晴れても乗船は断念しなければなりませんが、思案の末、予定時間を少し早めて実施することとしました。

乗船を予定していた「小堀（おおほり）の渡し」の渡船は、明治末期の河川改修で茨城県側と分断されてしまった取手市小堀地区の住民が、大正三年の新河道への通水時より、役場や学校のある対岸へ渡るために始めたものです。９０年以上の歴史があり、現在は市営となりましたが、平成１１年に循環バスが運行するまでは、地区住民の通学や生活の足として活躍していました。

当日は１０時３０分に参加予定の７名が取手駅に集合、循環バスで利根川を渡り、対岸の小堀地区に向かいました。渡船は地区住民は無料、住民以外でも片道１００円という料金ですが、循環バスは誰でも無料で利用できます。

バスを降りるとまず江戸時代末に赤松宗旦によって編まれた『利根川図誌』にも記されている水神社へ参拝、続いて古利根沼の周辺を散策しました。小堀地区は利根川本流と旧河道の古利根沼に挟まれた三日月形をしており、昔ながらの風景も残されています。また、古利根沼の周囲、特に我孫子側には豊かな自然が残されていますが、以前は沼を埋め立てる計画もあったとのことです。

古利根沼・対岸の森は我孫子市

続いて利根川を少し下流側に歩き、葦の茂る河川敷の公園（利根川ゆうゆう公園）で昼食、再び循環バスで取手駅口に移動しました。予定では解散のはずですが、停留所の斜向かいに「田中酒造」の看板が見えました。時間は二時前でまだ青空が見えています。誰とはなしに店先に向かうと堂々たる古民家の店構え。清水塾長携帯の『利根川散策絵図』に取手の名酒として「君萬代」の絵が紹介されていましたが、入ってみると当にその造り酒屋さんで、このお酒は利根川の伏流水と地元産のお米で醸されるとのことです。お酒の試飲をいただきながら、それぞれ好みのお酒を求め、少しイレギュラーな「学習会」幕を閉じました。

是非次の機会は好天日を期して渡船したいと思います。

洪水対策の水塚（みずか）の石垣の残る小堀地区

■秋のいきもの調べ　　増井太樹
−上ノ原は昆虫たちの楽園でした！

上ノ原の草原で昆虫を見たことがあるでしょうか？もちろん、少し歩くだけでバッタやチョウなどを私たちは見ることができますし、耳を澄ませば、虫たちの鳴き声を聞くことができます。では、その虫たちがどれくらいの種類いるか、どのような色、形をしているかご存知でしょうか？

実は私も昆虫については、まったく知りません。そこで私の知り合いで昆虫に詳しい「世田谷すみればネット」の山崎氏に協力してもらい、9 月に昆虫調査を行いました。

調査を行った日は晴天。山崎氏は草原に到着するなり早速、虫取り道具を準備し、手際よく虫を探していきます。たたき棒と、たたき網（ビーティングネット）を使いススキについている昆虫を探していきます。バッタやハムシ、カメムシの仲間など、様々な昆虫が網の上に落ちてきます。中には 2〜3㎜ 程度の小さな虫もいます。私には小さい昆虫はなかなか見分けがつかないのですが、「時期が違えば、また違ったものが見つかるんだけどね」と言いながら山崎氏はどんどん進んでいきます。

トンボやハチなどのたたき棒・たたき網で捕まえる事のできない昆虫は捕虫網を使って捕まえていきます。アキアカネやマユタテアカネ（次頁写真）等のトンボ類が多くいたほか、訪花昆虫として重要とされている、オオ

マルハナバチやトラマルハナバチも確認されました。チョウ類ではギンボシヒョウモンやキベリタテハといった群馬県の絶滅危惧種とされているチョウが生息していることもわかりました。そして、私たちが維持してきたこの草原で多くの貴重な生き物が暮らしていることがわかりました。

では、森林はどうでしょうか？草原の調査をした後に、森林内の調査も行いました。草原内でも同様の調査を行

いました。森林内ではゾウムシの仲間やカミキリムシの仲間がいましたが、中でも私が驚いたのが「トワダオオカ」という蚊の仲間です。蚊といえば私たちにとっては迷惑な存在と思いがちですが、この蚊は血を吸わず花の蜜を吸うという蚊で、また日本の蚊の仲間で最も大きく日本各地で絶滅危惧種となっているものです。このような希少で私たちの認識を変えるようなものを、この上ノ原では数多く見ることができます。

調査を終えて山崎氏に話を聞くと、「面白いいきものがたくさんいてビックリした。来年もまた調査に来たい」ということを言っていました。来年は、コモンズ村のプログラムの一つとして調査も行いたいと思いますので、皆さんもぜひ、普段接することの少ない、昆虫の世界にいらしてください。

●上ノ原の昆虫リスト

2012 年 9 月に 2 回行ったいきもの調べでは、60 科 144 種の昆虫が確認されました。コウチュウ目（ゾウムシやテントウムシ、カミキリムシの仲間など）が 56 種、カメムシ目（アワフキムシやカメムシの仲間など）が 40 種確認され、中には絶滅危惧種も確認されています。

これだけ様々な希少な昆虫がいるだけでも驚きなのですが、ヒウラヒサゴナガカメムシは約 40 年ぶりの発見になるかもしれないほどの大発見で、今まで日本で 5 個体しか確認されていないという、とっても希少な昆虫です。伐採されたミズナラの枯葉についており、（確かなことはいえませんが）私たちが自然に様々な働きかけをして、いろんな環境を作り出していることが、このような希少ないきものの生息場所を守っている可能性があります。

さらに調査中に、もう一つの大発見！　調査中にクマタカが上ノ原の草原を飛翔しているのが確認されました。草原の背後の森林から飛び立ち、武尊山の方向に飛んでいきました。羽の色や羽に欠損がないことから若鳥とも考えられ、もしかしたら巣が近くにあるのかもしれません。いずれにしろ、上ノ原の草原をクマタカも利用していることは間違いないようです。私たちが維持している草原にこんなにたくさんいきものがいること、これこそが私たちの活動の成果かもしれませんね。いきものにぎわう上ノ原をこれからもずっと残していきたいと思った 9 月の調査でした。

表　:上ノ原で確認された希少な昆虫類

確認種			確認地区		備考
目名	科名	和名	草地	林地	
バッタ	カンタン	カンタン	○		群馬県:準絶滅危惧
	キリギリス	ヤブキリ	○		群馬県:絶滅危惧Ⅱ類
カメムシ	ハネナガウンカ	アカハネナガウンカ	○		群馬県:準絶滅危惧
	ナガカメムシ	ヒウラヒサゴナガカメムシ		○	原記載以降 5 個体の記録のみ
ハエ	カ	トワダオオカ		○	群馬県:注目
チョウ	タテハチョウ	キベリタテハ	○		群馬県:準絶滅危惧
		ギンボシヒョウモン	○		群馬県:準絶滅危惧

■特集
全国草原サミット・シンポジウム in みなかみ

「川でつながる草原の恵み」を合言葉に開催された関東地区初の全国草原サミット・シンポジウム。第9回にして初めて『流域コモンズ』という概念を鮮明に打ち出しました。3日間にわたり展開された様々なプログラムやイベントの様子を、参加された皆さまのレポートや感想文によってお知らせします。（編集子）

川でつながる草原の恵み

小山尚子（千葉県印西市「亀成川を愛する会」）

■　草原と温泉のまち、みなかみ

10月27日から二泊三日で、群馬県みなかみ町で開催された草原サミット・シンポに参加しました。

温泉とスキー場、利根川の最上流のダムで有名なみなかみ町は、紅葉の盛りでした。

会場は、みなかみ町藤原地区。ダムの町です。この 100m近く下に集落が沈んでいます。利根川上流の急峻で深い渓谷にありました。

藤原地区は、ただ一本の橋で他地区と行き来していました。地元の林親男さんの説明では、他から人が入らないので、善人ばかりの完全循環型社会だったとのこと。これに関しては、わずか 3 日間の滞在ではありましたが、なるほどと納得。

茅場で刈った茅は、一部は馬のエサとなり、雪の日、そりで、集落まで運び、共同で屋根の茅を葺き替えました。古くなった茅は焼いて灰にし、堆肥として使いました。

茅葺き屋根のてっぺんには、飢饉に備えて、ヤマユリなど食用の野草が植えられています。

戦後、茅場として使われなくなり、森林化が進んでいましたが、東京の森林塾青水さんが、地元との粘り強い話し合いにより、都市のボランティアを呼び込んで茅刈を実施し、草地を復活させました。なみなみならぬ努力があったことと思います。「確かな未来は、昔の里山の暮らしの中の知恵にある」とは、清水塾長さんのお話し。

■　27 日の入会の森と藤原地区見学

大漁旗が見えます。江戸川が海に注ぐ千葉県船橋市の漁師さんの参加です。昔から漁師は、「魚は山のもの」と言っていたとのこと。『海は森の恋人』と同じ知恵ですね。

さていよいよ入会の森に入りました。地元の林親男さんの名解説に加えて、同じグループになった養父志乃夫先生、茨城博物館の小幡和男先生、山梨県の乙女高原ファンクラブ代表世話人の植原彰先生からも、直接教えてもらえて超ラッキーな観察会でした。

千葉県に住む私たちには珍しい日本海側の植物をはじめ、多様な植生に目をぱちくり。あまりにも美しい森なので、最終日にも再度訪れました。

■　28日のシンポジウム

養父志乃夫先生の講演『里山における人の営みが、生物多様な環境を維持』

講演のあとは、乙女高原ファンクラブ、公益法人阿蘇グリーンストック、森林塾青水の活動報告、4つの分科会に続き、パネルディスカッションがありました。

司会は全国草原再生ネットワークの高橋佳孝会長、草原サミット・シンポジウムの生みの親。たいへんお世話になり、とても貴重な助言と励ましをくださいました。

亀成川を愛する会では6枚のパネルを展示して会の活動や亀成川源流部の自然のすばらしさを紹介しました。

■　29 日のサミット

まず、会場の藤原小中学校のみなさんの歓迎の歌。藤原の歌や群馬県の歌など。自分の出身県の歌など歌ったことがないので（千葉県歌があるのかどうかも知りません）、なんだか群馬県やみなかみ町の住人になった気分。みなかみの大ファンになりました。

今回の会場を提供された藤原地区の皆さんには、すっかりお世話になりました。27日の観察会の時のおいしい泉の水を使った野点や地元野菜のおやき、28日の懇親会のごちそうにシンポ・サミット会場での毎度のおやつとお茶など。感動に継ぐ感動で、藤原地区の方々の心づくしのおもてなしに心打たれました。

地元の市町村長がそろいぶみの上、熊本県、島根県、広島県からも市長や村長さんがかけつけ、9市町村の首長が発表と話し合いをしました。論議のレベルの高さに草原サミットの力を感じました。

サミット宣言文を読み上げる岸みなかみ町長。

29 日の朝見られた虹。希望の光のようでした。

さまざまな出会いがありました。多くの方々から助言を

いただきました。また、たいへん力強い励ましもいただいて、とても意義深い三日間でした。

このような有意義な機会を作ってくださった森林塾青水の皆様のお骨折に感謝いたします。

写真；　逆井重男（亀成川を愛する会）

◆「草原サミット・シンポジウム」参加私記

乾　和佳葉（東京在住）

清水さんとの出会い

私の全国草原サミット・シンポジウムへの参加は、塾長との偶然の出会いがきっかけだった。

10 月 17 日のお昼過ぎ、前の日から午前中までの山歩きを終え、1 泊お世話になった湯の小屋「葉留日野山荘」の庭でお茶を沸かして 1 本見送ったバスを待っていたときのこと。にこやかに声をかけてくださるおじさま。背負ったデイパックから木の棒が飛び出している。お話をうかがうと、ススキの草原を育てる活動をされていてその日は林野庁の方の案内でみなかみに来られたとのこと。道理で鎌(ナタ鎌)があるわけだ。山林の下刈り手伝いの経験から林業について関心はあったし、私がちょっと釣りをすること、山歩きが好きなことをお話しすると色々な接点があることに驚き楽しく盛り上がる。やがてバスの時刻が近づき、名刺を頂戴して記念撮影。またどこかでお会いできましょうか、などと言葉をかわしつつ別れた。

サミットへの参加

その後、青水の活動への興味がふくらみ、直近のイベントであるサミット・シンポジウムに参加できないかと塾長に連絡をとった。申し込んだのは土曜日の上ノ原・藤原見学と日曜日のシンポジウム。本来ならば、11 月の茅刈りに参加して直接活動を体験してみたかったけれど、結果的にはここで多くの人とお会いすることができてよかったと思っている。

上ノ原見学

土曜日早朝、東京の自宅から電車を乗り継いで水上駅まで乗る。参加者のための送迎バスまではまだ時間がある。上ノ原がどんな場所なのか、なるべく自分の足で確かめたくて藤原までは路線バスに乗り、上ノ原まで歩くことにした。途中、藤原小中学校、諏訪神社や雲越家旧家を見、シーズン前のスキー場を通り、ひたすら登り坂を歩いてゆく。山の低いほうには集落、その上にある茅場を実感する。途中の針葉樹林ではツタウルシが鮮やか。坂を登り切って道が大きく左に逸れると、焚火の煙と大漁旗が見えてきた（写真下）。受付を済ませ、二週間ぶりの再開を果たした塾長をはじめとして数人の方にご挨拶。持ってきた昼食と、振舞われた熱々のきのこ汁をいただいて一息つく。ほどなく開会式で、短いながらも漁業に携わる方のお話、塾長のお話など興味深くうかがう。当初怪しかった雲行きも、幸い青空が少しのぞくほどに回復してきた。

その後海老沢さんのご案内で茅場とその周辺の植物や水場を見学させていただく。ススキが繁茂している中にもすぐ勢力を盛り返すタニウツギなどの潅木のこと、所々に残されている広葉樹の立木のこと。茅場と樹林帯の境目付近の植生はバリエーションが豊富で面白い。海老沢さんや北山さんの知識に感服しつつ木の枝を齧ってみたり（苦いキハダ！）、葉っぱをむしって匂いをかいだり、わずかに聞こえる虫の声や鳥のさえずり、土を踏みしめる音など、五感でフィールドを楽しんだ。ただ後のスケジュールも押していたことから少々慌しさがあっただろうか。次に訪れるときはのんびり歩いてみたい。

フィールドを歩いた後は、湧水を汲んでたてた岡田さん心尽くしのお茶をいただく。甘いお菓子と軽い渋みのきいたお薄茶が爽やか。短い時間ながらも落ち着いたひとときを過ごせてよかったと思う。

藤原見学

バスに乗り、旧雲越家、諏訪神社で茅葺き屋根の見学。まだ半分古いままの屋根を面白く見る。道を下って平出集落のあたりに入り藤原ダム事務所の方からダムの説明。地元の方からはダムができる前の集落のお話。地元の皆さんとダムの関係が、よくわかる一時だった。塾長からは水源地としての草原のお話。取って付けたようになったのは致しかたないものの、大事なフォローだった。

再び上ノ原

今回惜しくも定員一杯で茅刈り体験はできなかったが、バスで上ノ原に戻るとボッチが幾つもできていて活動の一端を垣間見ることができた。（写真上）

茅刈りは稲刈りと異なり多くの茅を体全体で束ねてから鎌を入れるのだと知り、想像以上の重労働なのだと理解した。今回は茅が乾燥して軽いけれど、これが青々としていたらさぞ大変なのだろう。来年はぜひ茅刈りに参加したい。星空観察会は雨と思って参加を見送ったが、参加された方のお話では星空が見られたとのこと。惜しい。

シンポジウム

私は「吉野屋」に宿泊して翌朝を迎え、おいしい朝食を済ませて藤原小中学校へ。みなかみの農産物の即売では豆などを求めた。

基調講演や各団体の取組はみな興味深かった。もちろん青水の活動についてお話された海老沢さんのお話もよく準備されていると感じたが、なかでも、乙女高原ファンクラブの方のプレゼンテーションは魅力的だったと思う。活動に参加したいと思わせる力があった。小学校の先生はプロフェッショナルだった。続いて分科会の会場へ。私は第３分科会に参加した。三菱 UFJ リサーチ&コンサルティングの皆さんの発表はさすがに周到な内容と感じたが、専門的な言葉も多く参加者には少々敷居の高いところもあったのではないか。
それでも濃厚な発表にしっかり噛りついて耳をかたむけていると様々な発想が湧いてくるもの。こうした草原や森林育成の活動にかかわる人を増やしていくには、いかに多くの人に活動をアピールするかに懸かっているのだ。今の若者は個人主義が先鋭化、価値観が多様化して繋がりが弱くなっていると見られがちだが、いざ気づきを得て価値観の共有ができれば熱心な取組が期待できるのではないか。流域コモンズという文脈においても様々な形で接点を用意していくことが活動の広がりにつながる。そんなことを思った。

シンポジウム閉会

帰宅が遅くなると大変と思い、当初申し込んでいなかった懇親会だったが、ここは多くの方とお話をするのに貴重な機会と思い直して参加を決めた。これが大正解。会場へのバスでは偶々和歌山大の養父先生と隣席でお話をうかがえたことを始めとして、会場では何人もの青水会員の皆さんと交流、濃厚な時間を過ごすことができた。サミットに参加できなかったのは心残りだったけれど、充実の２日間、多くの宝物を胸にしまってみなかみを後にした。次に来るときは銀世界かな？

◆サミットで盛り上がった「お茶っぴき」

武子さん、フミ子さん、ゑみ子さん

大好評だった野点

サミットのあと、武子さんとフミ子さんが見えて「お茶っぴき」になりました。
まず、カルピスで乾杯。秋野菜の煮物、南瓜とトマト、林檎のサラダや漬物をつつきながら、サミットの話で盛り上がりました。

武子さんは、野点にも源流賛歌にも参加しており、「これほど大きなイベントとは知らなかった。熊本の西原村長さんのお話などに驚いた。皆遠くから、立派な方々が参加して下さり凄い事だったんだね」と。

フミ子さんは、懇親会のご馳走の話になって「私も源流賛歌の仲間に入っておけば良かった！」　「物産展を来年またやってほしいな」と、大変売れたことを喜んでいました。

皆で写真を見ながら、「上ノ原の紅葉は一番いい時だったね」。美しさに見とれながら、「矢張り、大漁旗も合うね」と。

野点の様子は武子さんが話してくれました。11 月の茅引きにも岡田先生がまた来て下さるとのこと。楽しみなことです。

おっ切りこみ（キノコと秋野菜と幅広のうどんの煮込み）を最後に食べて、お開きは５時頃になりました。とても愉しいお喋りの半日でした。

◆フイールド調査と草原サミットの感想

岡村奈実（東洋大学２年生）

第3分科会の様子

この度は草原サミット、シンポジウムに参加させて頂き、また様々な貴重なお話を聞かせて頂き、本当にありがとうございました。今回私たちはみなかみ町の自然資源であるコモンズを活かしどのようにして地域活性化に結び付けるか考えてきました。
シンポジウムや第３分科会に参加させて頂いたことで、現在みなかみ町の自然資源はどのように活かされているのかを知ることができ、これからその自然資源にどのようにして価値をつけ広めていくか考えることができました。今回の活動に参加して、森林塾青水は地域住民だけでなく様々なつながりがあり、一つ一つの組織がそれぞれの形でみなかみに関わっていることを知りました。
また、実際にフィールドに入り、茅刈を行うことで自然の中に入り活動することの気持ちよさ、自然の美しさを感じることができました。地元の方から美味しいきのこのお味噌汁を頂き、ご指導いただきながら集中して茅を刈り、森林塾青水の方や他の組織の方、住民の方などと交流し、色んなお話を聞くことができました。茅刈をすることの達成感を体験し、楽しく、充実した時間になりました。みなかみ町や森林塾青水の活動について事前学習はしていましたが、活動に参加してよりみなかみの自然資源の魅力に気づけたと思います。そして地域の中に

森林塾青水の活動を通してこのような住民や他地域の方々の交流の場があることもみなかみの魅力のひとつとなっていると思いました。
活動に参加したことでみなかみ町の魅力に気づいた反面、この魅力を訪れていない、参加していない人々へどのようにして伝え、担い手を増やしていくのか、これから自然資源をどのように利用することができるのかという課題にも気づきました。また、この課題に対しても森林塾青水は向き合っていることを感じました。
　お忙しい中ご指導して頂き感謝しております。今回体験し、見つけた課題について深く考えていきたいと思います。

◆草原サミット反省メモ

川端英雄（森林塾青水）

■はじめに：特に強く感じたこと
・懇親会と閉会式の運営は、地元のみなさんによる手作り感があって、感動的だった。食事や配膳についても、地元の熱心さが溢れていた。涙が出そうなまでに感激した人が３人はいた。
・地元の人たちの動員数も多く、サミットを機にコミュニティが強化できたのではないだろうか。
□初日・上ノ原
・草原に翻る大漁旗は印象的だった。参加者にも印象が残ったのではないか。
・多くが初心者の茅刈り体験にしては、２７５束は多かった。数は力なり、か。
・藤原見学コースも、「日常生活にない新鮮さを受けた」との感想があって、全般的に良かったのではなかろうか。
・青森から女子大生が‘オオハンゴンソウ’の勉強にと、単独で参加。草原サミットの裾の広がりを感じた。白川学芸員を紹介、多分うまくいったと思う。
・トイレ案内は適正だった。＊将来上ノ原にトイレ設置は必要か。
□２日目・シンポジウム
・各団体の掲示内容良かったが、利根川下流域の船橋の掲示が無かったのは、画竜点睛を欠いたか。
・物産販売も素朴で味があったが、もう少し購買意欲を湧かせる展示法を工夫しておけば、販売額は１２万円を超えたのではなかろうか。
・各地からの実践報告は、いずれも興味深く聞けた。
・第３分科会の発表は内容と時間がマッチせず、理解と興味は不充分だったのではないだろうか。「草原再生活動と遊離していないか？」の質問には、賛同者が数人いた。
◆全体討論会
・「危機感が足りない！」の檄には、半面の真理があると思った。活動はリーダー如何によってはどうしても内向き、情緒的に流れる傾向は否めないので。
・「老人（社会情勢として、こんな表現でよいかと思われるが）」力をとりこむことは、地域共通の課題として検討されるべきではないか。草原ネットワークでとりあげてもらえると良いのだが。
◆懇親会
・地元民の受け入れ姿勢が良く、運営にも、特に問題点を感じなかった。
□３日目・サミット
・閉会式の、小中学生を中心としたオカリナと合唱は、とても印象的だった。
・みなかみ町長、沼田市長の発言趣旨が明快、かつ、力強くてよかった。
・水源域、川中、川下の流域コモンズを謳うのであれば、次回は草原ばかりでなく**流域の活動家の発表にも、ウイングを広げてはどうだろうか。**（中之条の発言もあったのだし）

◆「草原サミット・シンポジウム」を終えて

木村伸介（みなかみ町役場・環境課）

　述べ 415 名をお迎へし、10 月 27 日から藤原小中学校体育館をメイン会場として開催された全国草原サミット・シンポジウムが 3 日間の日程を終了した。開催までには 2 年の準備期間を費やした。開催日を森林塾が毎年茅刈を始める時期に設定し１０月２７日から２９日の３日間と決め、町長を会長とした実行委員会を立ち上げ会場の選定や内容の検討が始まった。初めに開催場所の選定にあたり、当然ホテルや町の施設を使用するものと思い、それを想定した案を実行委員会で示したが、町長の「今回のサミットは、藤原地区で完結する。」の一言でメイン会場が藤原小中学校体育会に、懇親会会場が宝台樹スキー場のレストハウスにと手作り感いっぱいのサミットになることが決定した。

次に内容の検討だが、これについては、実行委員会の副会長でもある森林塾の清水塾長を中心とした塾のメンバーとサミットの管理運営をお願いした同じく塾事務局でコミニティデザイン代表の浅川氏の下、詳細な行程等検討を行い、全国草原再生ネットワーク高橋佳孝会長の全面的な協力を得て、初日に地元見学会、中日にシンポジウム・分科会・懇親会、最終日にサミットとスケジュールが決定していった。現地見学会は、茅刈り体験コースと藤原集落見学コースと２コースに分け参加者の選択肢を広げ、シンポジウムには和歌山大学大学院教授の養父志乃夫氏に基調講演をお願いした。また、４つの部会を設けた分科会には、それぞれの部会を日本茅葺き文化協会を始め各分野で活躍されている団体にお願いした。サミットの宣言文についても協議を重ね原案を作成したものを参加首長に確認してもらうだけになった。

後は地元の受け入れ態勢と参加者への周知だ。手作りのサミットに決定してから地元に物産係や飲食係等実戦部隊を組織した。懇親会をメインとした３日間の飲食については商工会にお願いし、地元の飲食係により提供してもらった。「なるべく地の物を使ってもてなしてやろう」との商工会山田事務局長の言葉通りのすばらしい料理となった。

最終的に９首長を始め延べ４１５名の参加者で賑わった３日間になったが、締切１ヵ月前になってもなかなか参加申込書が届かない。実行委員会の席上で現状を報告し、各委員の方々に参加者の集客についてお願いするが、締切一週間前になってもあまり増えてこない。再度各委員の方々にお願いしお声掛けをしていただいた結果、締切日を待っていたかのように申込書が届くようになった。締切日を過ぎても申込み書が届くので締切日を延長し、更に参加者を募ったため、受付確認ハガキの送付は３日前まで続くことになった。

会場準備は地元民宿組合、役場職員、商工会職員で行い当日を迎えた。藤原小中学校の生徒の「私たちの村を気に入ってくれましたか」との問かけに「気に入った」と答えてくれ、最後に全員立ちあがって『ふるさと』を合唱してくれた参加者の皆さま、サミット成功にご尽力くださった関係者全員に感謝します。

◆トピックス：地元物産販売が活況！
ーサミット会場「地元物産店」報告ー

北山郁人

○大勢の地元の皆さま方から、以下のような出品をいただきました。

林ゑみ子（押し花はがき、すすきフクロウ、マグネット、キーホルダー）
阿部典子（セーター、ぞうり、布製袋、ドライフラワー）
大坪保吉（箸立て、楊枝、皿、しゃもじ）
中島　武（とら豆、ワラビ、ぜんまい）
高田　保（ジャガイモ、白菜、サツマイモ、青トマト）
深津フミ子（金時豆、とら豆、カボチャ、カブ、ぞうり、大根、ドライフラワー）
集古館　（米、写真集、招福槌、小豆、とうがらし）
林　三郎（花豆、あずき）
関ヶ原　（小豆、ふろう豆）
中村智子（写真絵葉書）
吉野屋　（フキ菓子）
惣一郎　（かんじき）

［敬省略］

○各家 3500 円～30,000 円の売り上げとなりました。単価が高い物も、説明書きなどもしっかりしていた上に、製品のクオリティーも高いためよく売れました。

○全体の売り上げは 122,500 円。うち、森林塾青水は 8000 円。10 周年記念の絵葉書セット『上ノ原の四季折々』やエコバック『飲水思源』が結構売れました。

○ご協力いただいた地元の皆さま方に、この場を借りてあらためてお礼申し上げます。

今後も機会をとらえて、地元物産の紹介に積極的に取組んでいきたいと思っています。その節は、よろしくお願いします。

■基調講演　養父志乃夫（和歌山大学大学院教授）
「里山における人の営みが、生物多様な環境を維持」

草原を含む里山は、「水や土、空気、雑木林から植林、竹林、果樹園、畑、溜池、小川、水田、土手、畦、屋敷から納屋、牛馬小屋など、一連の環境要素がつながった暮らしの場」である。そこには、人が生まれてから一生を暮らし、世代を重ね、多くの子供たちを育む共同体があった。そして、徹底循環型の持続可能な生活文化、まさに命と暮らしの“おおもと”を築き上げてきた。里人たちのしわだらけの手足とその意思。そこには、皆を守り、次代を育てる暮らしの作法と心が息づいていた。

この暮らしの場こそが、豊かな生物多様性を育んだ。みなかみ、そして、藤原は、食糧（食料）や燃料、水、共に暮らす仲間の絆等々、生活に求むものをすべて再生産できた。首都圏の分まで作り出す“ちから”があった。とりわけ数多くの若者を送り出し続けた。しかし、今、その里山は、どうなっているのであろうか。大半の若者が都市に消え、過酷な過疎と集落崩壊の現実がある。そこでは暮らしも文化も消え去る。次代の暮らしも消える。

われわれは、これから如何に暮らしを築き、次代を育むのか？ 如何にして子供たちに将来への夢と希望を育むのか？ 燃料、食料、水など、暮らしに必要な品々を如何にして手に入れるのか？ 如何にして環境への負荷を減らし、野生の生きものと共存していくのか？

高度経済成長前、昭和 30 年代までの暮らしには、持続可能をもといとする生きるための知恵と技、作法がある。不便を感じるにしても、2000 年以上、人々の暮らしを支えてきた。燃料やワラなどの有機物を繰り返し使い込み、最後は燃料として循環させた。その時に出る CO２が再び植物に吸収され、新品の酸素と燃料を再生した。水も一度で捨てたことはない。沢水を生活用水に使う集落は、排水を養魚池やハス田、稲作田へと順に流し、魚や作物に有機物を徹底的に吸収させた。浄化された余水は、再び沢に戻り、数多くの魚介を育んだ。作物や魚介の一部は人々の食料に循環した。エネルギーの源は、化石燃料でも原子力でもない。ほぼすべてが太陽である。

この暮らしは、決して古くさくはない。現代的な視点から今の暮らしを一つ一つ見直し、そのいしずえを見直すときに来た。源流から里海まで、そして田舎から都会まで、流域の皆が心を一つにし、暮らしと命の“おおもと”を蘇らせるときである。このまま行くと、あすの首都圏、あすのみなかみ、そして藤原はない。すべては利根川の流れが知っている。流域協働の絆。この“ちから”が広まらんことを願ってやまない。（事務局要約）

■実践報告　海老沢秀夫（森林塾青水）
「人と生き物が入り会うコモンズ村・ふじわら」

フィールドを捜していた森林塾青水に、水上町（当時）が紹介してくれたのが藤原地区の上ノ原だった。町有地で、面積は約 21ha。森林部分と草地部分がそれぞれ半々を占めている。草地部分は地元の人たちが茅場として入会利用してきた場所だが、タニウツギやシラカバが生え、森林化が進んでいた。森林部分はミズナラの自然林。炭焼きなどに利用されていた旧薪炭林だ。

2003 年に町と賃貸契約を結び、活動を開始する。活動の方向を探るため、まず 03 年の１年間、草地とミズナラ林の現況調査や、地元の老人らに上ノ原の利用の歴史などの聞き取りをした。かつて上ノ原は、200ha もの広大な茅場だったこと、春先に残雪を防火帯にした野焼きをしていたこと、上ノ原は生物相が豊かで、30 年前の調査では群馬県に生息するチョウの３分の２の種類が上ノ原にいたことなどを知る。私たちは地元の人たちと一緒に「茅場を再生する」ことを決意した。

翌 04 年４月、地元住民や町と協働で茅場の野焼きを 40 年ぶりに復活。翌５月からは、一般参加者を公募して茅場の再生活動が始まった。生物相調査やヒアリング、草地に侵入した樹木の除去作業や茅刈りなどを年６回実施。作業ではほぼ毎回、地元の経験者が先生として参加した。「コモンズ村・ふじわら」と名付けたこのプログラムは、私たちの上ノ原での基本活動として、９年たった現在も続いている。

上ノ原の利用は現在、文化財などの伝統的建築物を扱う町田工業が参画し、屋根用の茅を供給・利用する仕組みができている。ミズナラ林でも、ストーブユーザーとのつながりが生まれ、新しい利用の循環ができつつある。集落と集落をつなぐかつてのコモンズである峠道（里道）の再生にも取り組み、都市住民も楽しめる「フットパス」として活用中だ。

「コモンズ」という言葉を使ったのは、「現代版の入会」を考えたかったから。地元によるかつての入会利用はすでに消滅している。草地生態系を保全しようとすれば、地元住民だけでなく下流部の都市住民もかかわる、より広範な共同利用・共同管理の仕組みが必要だ。草地の利用にしても、生き物の生息地、水源、文化資源、エネルギー、景観など現代が要請する新たなサービスを意識する必要がある。かつての入会地「上ノ原」の活動が、流域のさまざまな人が入り会う新たなコモンズの実践例になればと願っている。（事務局要約）

第９回全国草原サミットみなかみ宣言

春の野焼き、草をはむ牛、風にそよぐ草、秋の草もみじ、冬には一面の銀世界。四季折々に姿を変える草原は美しく、花や虫などさまざまないのちにあふれ、私たちを魅了してやみません。

かつて草を使うことで保たれてきた日本各地の草原も、時代の変化とともにあるものは放置され、またあるものは開発され、いつの間にかわずかになってしまいました。

残された草原も、地域の過疎化や高齢化が進み、このままでは管理をし続けることが難しくなっています。

草は、刈っても刈っても生えてくる頼もしい資源です。先人たちは、そうした草原の恵みを上手に活かす仕組みと知恵を育んできました。日本の「草の文化」です。しかしそれもまた失われようとしています。

草原に今日的な価値を見いだし、草原を活用し、守ろうという新しい動きもあります。バイオマスエネルギーや建築材、エコツーリズムや文化、環境学習の場、生物多様性保全の場など、地域づくりに活かす試みが各地で見られるようになりました。

草の文化を引き継ぎ、こうした新たな動きをよりいっそう進めるために私たちは、多くの人が草原を知り、理解を深める機会を提供してまいります。

また、草原を守り、草原の恵みをこれからも享受するために、草原にかかわって暮らす人やさまざまな取り組みを行う人の活動を支援することに最善を尽くします。

草原を持つ自治体だけでなく、都市部の自治体も協力・協働して草原にかかわり、その恵みを多くの人々で分かち合い、支え合うことを目指します。

そのためには自治体同士が連携を深め、首長をはじめ地域住民が交流し、情報交換を行うことが重要です。現代まで残る貴重な草原をこれ以上失うことなく、美しい姿で後世に引き継ぐために、今後も私たちは交流を継続し、全国の草原を保全・活用する取り組みを続けることを、群馬県みなかみ町において宣言します。

平成24年10月29日

第９回全国草原サミット議長
群馬県みなかみ町長

前回開催地
広島県北広島町長

茨城県取手市副市長

群馬県沼田市長

群馬県片品村長

群馬県川場村長

群馬県昭和村

島根県大田市長

熊本県西原村長

■写真で見る
「茅ボッチの運び出しとその行方」　事務局

草原サミット初日、茅刈り体験で皆さまに刈り取っていただいた茅は275束。その後11月中旬までに、地元の皆さま方が 2,290 束。計 2,565 束(513 ボッチ)が上ノ原のあちこちに林立していました。その茅ボッチの運び出しを、11 月17日～18日、講座「コモンズ村ふじわら」参加者と地元ならびに町田工業の皆さんで協働して行ないました。
その様子と茅の行く末を写真でご紹介します。(編集子)

写真1
サミット初日に立てられた茅ボッチ

写真2
トラックが入る場所まで引き出します

写真 3
管理道沿いのトラックに積み込みます

写真4
地元へ寄贈分は集落内の倉庫へ、残りは町田工業の倉庫(中之条)へ

写真5
地元寄贈分はやがて、諏訪神社の屋根替えに

写真 6
大方は、関東一円の重要文化財の茅葺屋根に

以上が大まかな流れです。茅刈りや引き出し・搬入は、決して楽な作業ではありません。また、町田工業さんが茅葺屋根材として使うに至る工程も手間のかかる仕事です。しかし、茅を刈って運び出すことは野焼き、侵入木の除伐と並ぶ、上ノ原の生き物たちにとって良好な生息環境を維持するために不可欠な作業です。

当塾では昨年度より、少しでも多くの地元の皆さまに茅刈り作業に参加していただけるよう、『環境支払い』制度を導入しました。地元で刈った茅は町田工業に買上げてもらっているのですが、その価格に当塾から一定金額を上乗せしてお支払いする仕組みです(エコポイント制度からの寄付金の活用です)。

またこれまでに、夏場に青刈りした茅を、町内の果樹栽培農園のブルーベリー用マルチ材や藤原集落の野菜栽培用肥料として使っていただく事なども試みてきました。

写真5
青刈り後、肥料にするため積まれたススキ

これらの試みは未だ実験段階の域を出ませんが、軌道に乗ると、生物多様性の保全と資源の地域循環型利用とが両立することになります。『懐かしいふる里の原風景を守り活かす上ノ原のススキ』、というブランド商品が誕生する日がくるかもしれません。どなたか、よいネーミングを考えておいて下さいませ！　(文責:清水)

藤原の“ほっと”ショット・コーナー④

地元・中村智子さんの、見てほっとする“photo”ショット・コーナー。前号は上ノ原の愛くるしい草花と昆虫たち。今号は豪雪の山里を棲家とするつわものたち。渡り鳥のジョウビタキをのぞき、皆さん藤原生まれの藤原育ちです。（編集子）

うちの近くで、笹を食べるカモシカ

洞窟で、冬眠する森コウモリ（藤原の某所）

夜、家に来たホンドタヌキ（冬眠しません。）

雪がチラつく中、田んぼに来たニホンザル

元気に木々を走り回るニホンリス（冬眠しません）10月末

飛んで来たばかりのジョウビタキ（冬鳥）　10月末

□　編集後記　～塾長のつぶやき　～

○林野庁職員たちの生物多様性研修会　10月17日～18日、林野庁ならびに都道府県の林務関係職員を対象とした研修会の受入れをした。生物多様性の保全をテーマに、行政と民間団体の協働のあり方を探りたいとの由。座学の講師ならお断りするところだったが、フィールドスタディの依頼だったので、喜んで上ノ原をご案内した。最後の締めに、「地域が持つ自然資源の今日的利用→自然環境のより良い管理→生物多様性保全」というサイクルづくりを協働で、と結んだ。例えばとの質問には、ミズナラ高齢木を間伐して割薪やキノコ栽培用原木として地域内で使

いまわす仕組みづくり、などとお答えしておいた。

全国各地の自然資源の地域循環型かつ今日的利用を官民で協働推進する。公益的機能を重視した森林経営を標榜して久しい林野庁が、市民団体と協働し全国で取組むに相応しいテーマであると思うが如何。

○草原サミットに思う：本当の成功は？　思い立ってかれこれ3年。なにもかも初めてのことだったので正直、不安と焦燥と苛立ち、でも頑張らなくちゃあ、といった汗みどろの道のりだった。でも終わってみれば、嬉しいこと楽しいこともいっぱいあった。準備段階で、上ノ原「入会の森」のフットパス地図や昆虫標本、四季折々のしおり、といった副産

物が生まれた。

開催9回にして初めて、念願の「流域コモンズ」を標榜することが出来た。そして初日、上ノ原の集合広場には、3本の大漁旗が合言葉『川でつながる自然の恵み』を象徴するかのごとく翩翻とひるがえった。実行委員長岸町長の「日本中の皆が、兎追いし彼の山の“ふるさと”を愛唱してくれるようになれば、美しい草原の自然は守れます」との力強いご挨拶に始まり、藤原小中学校児童たちの“ふるさと”大合唱で終わった3日間。最終日の朝には、源流の山里・藤原に大きな虹がかかった。流域の人々と次世代の若者たちにつなぐ希望の光のようだった。多くの参加者から「参加して良かった」など賛辞と感謝の言葉をいただいた。関係者一同で共有し「大成功だったようで良かったね」と労をねぎらいあった。

しかし、本当に成功だったのか。互いに学び合い習得したことを、それぞれの持ち場で実践し結果を出せた時に初めて、成功と言えるのではないか。フィールドはいずれも中山間地域にある。地域住民や行政のニーズでもある交流・移住人口を増やし、地域に雇用をもたらすような「資源の循環的利用の新たな仕組み」が出来て初めて、胸張って成功だったと言えるのではいか。『誰が架けたか虹の橋』という一節が藤原小中学校の校歌にある。その希望の橋をかけるのは、他でもない我々自身なのだ。

○区長と十二神様と水神「靈（おかみ）」　11月17日昼前、上ノ原に到着。茅ボッチの引き出しと「山の口終い」が目的。あいにく積雪10㌢の悪条件、ちょっと難儀だなと思った。ところが、サミットで刈った茅の大方は、既に林区長が引き出して下さっていた。「地元に寄贈してくれるんだから、引き出すくらいはこっちでやんなきゃ」と笑顔のご挨拶。お願いしたわけでもないのに、黙ってやって下さった区長のお姿が神さまのように輝いてみえた。　その折、「十二神様というけど、どんな神さま達なんですか？」とお尋ねがあった。後日、「大山祇神、於久山祇神、戸山祇神ほか12の神々の名称を記し、そのうち加屋野姫神ほか4神は草地や茅場を司る神々であったと思われる」旨を記述した本誌『茅風』34号をお届けした。

かねがね、十二神様の仲間に水神が加わっていないのはおかしいと思っていた。そこで今年の「山の口終い」用に、「靈（おかみ）」の幟旗を持参していた。貴船神社をはじめ、近くは榛名神社や大山阿夫利神社にも祀られている水神の横綱格である。森林塾青水が発足の折、合流した「水源の神々を語る会」の旗印でもあった。上ノ原「入会の森」は利根川源流域に位置する。水源の森の神として、十二神様たちと共に我々の活動を見守っていただきたいとの思いで幟旗を掲揚させていただいた次第。

上ノ原は既に積雪1㍍余、神々も永い冬の眠りにつかれたか。

＜茜さす紫野行き標野行き
　　野守（のもり）は見ずや君が袖振る＞　　額田王

いつの日か「野守になりたい」と思う年の瀬だった（青）